

釈尊の生涯(3)

転法輪 ～ 入涅槃



(クシナガラ 涅槃堂の朝)

初転法輪 梵天の勧請を受けたブッダは、

いま、われ、甘露の門をひらく。

耳あるものは聞け、ふるき信を去れ。 (『サンユッタ・ニカーヤ』)

と、天地に向かって伝道を宣言し、80歳で涅槃に入られるまで伝道の旅を続けることになりました。

ところで、ブッダが最初に選ばれた地は、ブッダガヤから200kmも離れたベナレス郊外の鹿野苑(サルナート)でした。そこには多くの沙門が集まっており、かつて釈尊と苦行を共にした五人の仲間がそこにいたからです。

中道 『サンユッタ・ニカーヤ』(パーリー経典「相応部」)の中の「転法輪経」によれば、ブッダはまず、五人の仲間に「中道」の教えを説いたといわれています。それというのも、五人の比丘は、苦行をやめたゴータマは堕落したと思い、袂を分かっていたからです。ですからブッダは、まず最初に、なぜ苦行をやめたのか、ほんとうの解脱の道はどこにあるのか、それを示す必要があったのです。

修行者らよ。出家者が実践してはならぬ二つの極端がある。……

一つは、もろもろの欲望において欲楽にふけることであって、下劣・野卑で凡愚の行いであり、高尚ならず、ためにならぬものである。

他の一つは自ら苦しめることであって、苦しみであり、高尚ならず、ためにならぬものである。

真理の体現者はこの両極端に近づかないで、中道をさとったのである。……

『サンユッタ・ニカーヤ』「転法輪経」(中村元)

【参照】 仏弟子ソーナ「琴の喩え」

「中道」の〈中〉は、2つのものの中間ではなく、2つのものから離れて矛盾対立を超えることを意味します。また〈道〉は実践・方法を指し示します。「正信偈」に龍樹菩薩は「悉能摧破有無見（ことごとく、よく有無の見を摧破する）」とありますが、この龍樹によって体系化された「中観派」にあつては、「中道」は「縁起」・「空」・「仮名^{けみょう}」と同じ意味です。つまり、「中道」とは、右でもなく左でもない真ん中という意味ではなく、右か左かにこだわってしまう人間の心（迷い）をこえて、如実にものを見る智慧に立つことであります。

四聖諦 さて、「中道」に続いて、ブッダが説いたのは「苦・集・滅・道」の「四聖諦」でありました。

実に〈苦しみ〉という聖なる真理は次のごとくである。生まれるも苦しみであり（生苦）、老いも苦しみであり（老苦）、病も苦しみであり（病苦）、死も苦しみであり（死苦）、憎い人に会うのも苦しみであり（怨憎会苦）、愛する人に別れるのも苦しみであり（愛別離苦）、欲するものを得ないことも苦しみであり（求不得苦）、五つの要素に執着する苦しみである（五蘊盛苦）。

実に〈苦しみの生起の原因〉という聖なる真理は次のごとくである。それはすなわち、再生をもたらし、歓びと貪りをともない、ここかしこに歓喜を求めるこの妄執である。……

実に〈苦しみの止滅〉という聖なる真理は次のごとくである。それはすなわち、その妄執の完全に離れさった止滅であり、……。

実に〈苦しみの止滅にいたる道〉という聖なる真理は次のごとくである。これは実に聖なる八支よりなる道である。すなわち、正しい見解、正しい思惟、正しいことば、正しい行い、正しい生活、正しい努力、正しいお念い、正しい瞑想である。

『サンユッタ・ニカーヤ』「転法輪経」（中村元）

「苦諦」とは、「人生は苦である」という真理（見切っていく智慧）です。その「苦」について四苦八苦があげられています。

「四苦」とは、生老病死の四苦、つまり生苦・老苦・病苦・死苦です。「八苦」はその四苦に愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五蘊盛苦の四つを加えたものです。その意味するところは上の経典にある通りです。

ほかに「苦」の性質に従って「苦苦」「壞苦」「行苦」の三苦をあげることもあります。「苦苦」は肉体的な苦痛です。「壞苦」は思い通りならぬことから苦痛です。「行苦」は諸行無常の存在であることから起因する苦であります。

ところで、現代は「幸せ」という言葉がもてはやされています。まるで、「幸せであるかどうか」が人生における唯一の価値基準のようです。そんな時代にあっては、人生を「苦」と見切っていく仏教は嫌われものになる運命にあるのかもしれないですね。

しかし、お互いに「幸せに」と言い合っていますが、その足許を見れば、「幸せ」はいつも見果てぬ夢として語られており、仮に実現していても、いつ崩れ去るか分からない不安定なものでしかありません。

家康の言葉として、「人の一生は重荷を負うて遠き道を行くがごとし」というのがありますが、それはどこか「苦諦」に通ずるものではないでしょうか。「苦諦」は、つい浮足立ってしまう人間（の心）にかけがえのない重しを与えてくれるのではないのでしょうか。

【参照】フランクフル「苦悩の存在論」

次に「**集諦**」とは、詳しくは「苦集諦」のことで、それは「**苦には原因がある**」という真理です。具体的には、苦は他に起因するのではなく、自身の無明（渴愛・執着）から**集起**する、という真理です。

「**滅諦**」とは、詳しくは「苦滅諦」のことで、それは「**苦は滅することができる**」という真理です。具体的には、「苦」の原因である無明（渴愛・執着）が止滅するとき「苦」から解放されるということです。

最後に「**道諦**」とは、詳しくは「苦滅道諦」のことで、それは「**苦を滅する道がある**」という真理です。具体的には、「苦」の原因である無明（渴愛・執着）を止滅するための道として八正道をあげています。

八正道 「八正道」とは、涅槃に達するための八つの正しい実践行のことで、享楽（自由）主義や苦行主義に偏らない「中道」としての仏教の修行方法です。

具体的には、(1)正見(正しいものの見方)、(2)正思(正しい思考)、(3)正語(いつわりのない言葉)、(4)正業(正しい行為)、(5)正命(正しい生活)、(6)正精進(正しい努力)、(7)正念(正しい集中力)、(8)正定(正しい精神統一・瞑想)の八つですが、その眼目は(1)の正見だと思います。その正見を得るためには(2)～(8)の実践が必要になってくるのです。

縁起 さて、この四聖諦・八正道の教えは「縁起の理法」から導き出されたものです。ゴ

ータマ・シッダールが菩提樹下の瞑想によって〈さとり〉を開き、ブッダ（覚者）になったということについては、すべての経典の認めるところではありますが、しかし、「何をさとしたのか」ということになると、経典によって違うそうです。

＊釈尊入滅から何百年たってからも「如是我聞」で始まるお経が作られ続けられたり、何をさとしたかについて諸説があったりと、ほんとうにインドの人々（の頭の中は）にはビックリさせられますね。

しかし、その中でも一番多いのが、「縁起の理法」をさとした、と説くお経だそうです。

「縁起」とは、「縁によって生起する」という意味で、初期経典では、

此有るとき彼有り、此生ずるより彼生じ、此無きとき彼無く、此滅するより彼滅する。（パーリ仏典経蔵小部『自説経』（ウダーナ）の冒頭）

という定型で説かれています。（此縁性）

この「此」とは煩悩（あるいは、それに無自覚な無明の状態）を指しており、「彼」とは苦を指しています。したがって、上記の命題は、

- 1、「煩悩」（無明）が有れば、「苦」が有り
- 2、「煩悩」（無明）が無ければ、「苦」が無い
- 3、「煩悩」（無明）が生じれば、「苦」が生じ
- 4、「煩悩」（無明）が滅すれば、「苦」が滅す

と言い換えることができます。つまり、「縁起の理法」とは論理的、自然科学的な意味での「縁起の理法」ではなく、「苦」からの解脱に道を開く実践的、実存的な意味での「縁起の理法」であります。

ゴータマ・シッダールは「苦」からの解脱を求めて出家しました。そして今、「縁起の理法」に目覚めることによって、「苦」からの解脱が可能になったのです。

なぜなら、縁起の理法は**自業自得（自因自果）**の教えであります。もし、「苦」の原因が「他」にあったなら（たとえば、自分の身体とか社会の制度とか運命とか…）、私はいかんともしがたく、愚痴に沈むか、運命を呪うか、あるいは超越的な神々に祈る、しかないでしょう。しかし「苦」の原因が、ほかでもなく私自身の「煩悩（渴愛・無明）」にあるとするなら、呪ったり祈ったりすることはお門違いとなり、なにはさておき「苦」の原因である「煩悩（渴愛・無明）」を止滅することが大事になってきます。

先にあげた「四聖諦・八正道」の教えも、前回触れた「自灯明・法灯明」の教え（自らを灯明とし、自らを依処として、他を依処とせず、法を灯明とし、法を依処として、他を

依処とすることなかれ)も、この縁起の理法から必然的に導き出されたものであります。

十二支縁起 さて、縁起の理法は次第に整えられ「十二支縁起」となっていました。十二支縁起とは、「無明、行、識、名色、六処、触、受、愛、取、有、生、老死」のことで、無明によって行が生じ、行によって識が生じ、識によって名色が生じというように、無明から次第して生や老死へと、因果をたどっていくものです。

十二支縁起において大切なことは、苦の原因を尋ねていって、ついに「無明」にたどり着いたということです。「苦」の根本原因として「無明」を発見したということこそ仏教の一大特徴であり、仏教が他の宗教や哲学と決定的に違うところでもあります。

「無明」こそ「苦」の根本原因であるということは、「無明」に光を差し込む「智慧」こそが「苦」からの解脱を可能にする、ということでもあります。こうして仏教は、神々に祈りを捧げる祈祷宗教を脱して、信実の智慧による「さとり」の宗教となったのです。

なお、無明によって行が生じ、行によって識が生じ、というように、無明から次第して生や老死へと因果をたどっていくのを「順観」といい、逆に、無明が消滅すれば行も消滅するというように観察していくことを「逆観」といいます。

この十二支縁起にある「…、名色、六処、触、受、愛、取、…」という了解の仕方は、私にはなかなかなじめないものです。乱暴かもしれませんが、人間の限りない流転を説明する「惑→業→苦」(惑^{わく}→業^{ごう}→苦^こ)の業感縁起^{ごうかんえんぎ}と基本的には同じことだと思っています。

三法印 苦からの解脱を求めたゴータマ・シッダールの歩みは、ついに、その根本原因として自己の奥底にすくう無明(渴愛)を見だし、その消滅(止滅)によって得られる、苦から解放された涅槃を明らかにされました。この道理をわかりやすく説いたのが三法印、または四法印であります。

三法印とは、仏教とは何かを明らかにする三つの旗印という意味で、具体的には、

諸行無常 (この世の中のあらゆるものは変化・生滅してとどまらないこと)

諸法無我 (全てのものは因縁によって生じたものであって実体性がないとい)

涅槃寂靜 (煩悩をまったく寂滅することのできた安住の境地)

の三つです。これに**一切皆苦**を加えると、四法印となります。

苦の根本原因として無明とは何かというと、一つは、「諸行無常」の道理に暗く、時の移ろいについていけず、過ぎゆきし幻影にいつまでもしがみつ়く闇の意識であり、もう一つは、「諸法無我」の道理に暗く、身近なものをわが物と錯覚しては掴んで離さない闇の

意識（我執）のことであります。

そんな無明に覆われて「苦」の大海に溺れていた者が、宿縁の熟して、ブッダの教える「諸行無常・諸法無我」の道理を聞き、その法にめざめることになるならば、無明の闇は晴れて涅槃寂靜の世界に生まれ出ることになる、というのが三法印の教えだと思います。

「無我」ということの実践的な意味は、「一切、我がものなし」（非我）と信知することで、苦をもたらす我執からの解放されようということです。

涅槃 29歳で出家し、35歳でさとりを開きブッダ（覚者）となった釈尊は、梵天の勧請を受けて、その生涯を、人々に教えを説く「転法輪」に捧げられました。

時に、ブッダ 80歳。ついにその生涯を閉じる日がやってきました。ブッダは王舎城を出て、生まれ故郷のカピラヴァストゥを目指して旅に出ましたが、その途中、鍛冶工チュンダの捧げたキノコ料理があたり、ついにクシナガラ（クシナガラ）の沙羅の二本の樹の下で涅槃に入られることになりました。

ブッダは、師が亡くなったあと何に頼ったらいいのか、途方に暮れているアーナンダに對し、

自らを灯明とし、自らをよりどころとして、他人をよりどころとせず、法を灯明とし、法をよりどころとして、他のものをよりどころとせずにあれ。

と、諭されます。この「自灯明・法灯明」の教えはブッダの遺言として今日まで語り継がれてきました。それというのも、「自灯明・法灯明」の教えこそ、自己の救済を神々に委ねるのでなく、自己の智慧（縁起の理法へのめざめ）によって苦（輪廻）から解脱することを説いた仏教の精神をよく象徴しているからでありましょう。

いよいよ最期の時がきました。ブッダはアーナンダに告げました。

アーナンダよ、お前たちはこのように思うかもしれない。「教えを説かれた師はましまさぬ。もはや我らの師はおられないのだ」と。しかしそのように見なしてはならない。おまえたちのためにわたしが説いた教えと、わたしの制定した戒律とが、わたしの死後におまえたちの師となるのである。

（「大パリニッバーナ経（大般涅槃経）」）

そして修行僧たちに向かって—

さあ、修行僧たちよ。おまえたちに告げよう。「もろもろの事象は過ぎ去るものである。怠ることなく修行を完成なさい」と。